

## 論文要旨

妖怪学とは人間学である、と小松和彦は再三強調してきた。現に本邦の妖怪学は、日本人の精神史に新たなページを加え、それをより豊かなものへと変えた。おそらくここに異論を差し挟む余地はない。筆者は、そんな学問を中国において展開できないか、と夢想するのである。また、それによって従来<sup>き</sup>の中国人像がガラリと書き換えられるだろう、と確信するのである。本稿はそのいささか壮大な目標に向けた第一歩となる。

まず本稿では、中国妖怪学の進むべき道を、先行研究——David Jordan及びArthur Wolfの系譜にある漢族〈鬼〉研究への批判から模索した。結果、これまでの研究では〈鬼〉の一側面——人を由来とする〈孤魂野鬼（幽霊）〉のみが研究対象とされ、人を由来としない〈精怪（妖怪）〉については等閑視されてきたことが判明した。そこで本研究は、従来<sup>き</sup>の研究者が盛んに議論してきた〈鬼（孤魂野鬼）から神へ〉の問題意識を批判的に継承し、〈鬼（精怪）から神へ〉すなわち〈精怪〉が〈神〉へと変容する事例を検討することとした。

具体的な研究対象として選ばれたのは無常鬼<sup>むじょうき</sup>という中国の死神であった。無常鬼は、〈孤魂野鬼〉より転じた〈底辺の神〉として、今日の中国人一般、ひいては学術界においても理解されていた。しかし実のところ、無常鬼の来歴についてはこれまで本格的な調査がなされておらず、また上記の仮説とは裏腹に、中国各地には無常鬼を〈精怪〉として語る伝承が散在していた。そうした事実を鑑みて、今日〈神〉として信仰される無常鬼は、（〈孤魂野鬼〉ではなく）〈精怪〉より転じた存在である可能性が濃厚と判断するに至った。筆者は〈無常鬼精怪説〉を唱え、論証を試みることにした。

具体的な作業として、無常鬼との深い関係が疑われる摸壁鬼<sup>もへきき</sup>および山魃<sup>さんしやう</sup>という〈精怪〉たちに注目し、それらが無常鬼の生成に深く関係した可能性を検討した。結果、第1章では、江蘇省南部の事例として、摸壁鬼が黒無常に変容していく過程が明らかとなった。また第2章では、長江以南の山間部に伝わる山魃と無常鬼の類似性を分析し、山魃の影響より無常鬼が生成する原理が明らかとなった。

上記の試みは、少なからぬ課題を残しつつも、従来<sup>き</sup>の無常鬼論にまったく新しい視点をもたらしたと同時に、中国妖怪研究の方法論および可能性を具体的に提示する、今後の展開にとっても重要な論考になったと筆者個人は評価している。